

## 七、服 装

——・地色の好みは單純色—冠履—附屬品——

朝鮮の在來服は上衣と下衣から成立つてをります。上衣は裕(저고)・綿入(솜옷)を襦衣(저고리)といひ、單衣(단옷)は赤衫(적삼)といひます。いづれも筒袖でありまして、長(た)げは胴までが普通ですが、婦人のは一層短くて、乳房(젖방)をのぞかせるほぎであります。左襟と前身頃の胸に長い幅廣ろの紐(오고름)が付けてありまして、右の胸脇で結んで餘端をサラリと垂れるのであります。下衣は裕・綿入を袴(바지)といひ、單衣を袴衣(고의)といひます。内地の股引様のものですが、非常に寛かに拵へてありまして、上は腰紐(허리띠)で括り、裾口は足頸に纏ひ、襪(보)の上から紐でシカミ括るのであります。

周衣(두루마리)は襦衣の上に着る衣であります。形は筒袖の長着に似て居りますが脇入(부)を非常に廣くし、下方に至るほぎ擴がり、長さは脛まであります、これにも平紐がありまして、右の胸脇に結んで垂れるところは襦衣と變りはありません。周衣は内地の羽織に相當するものでありまして、通常禮服として一般に認められ、外出には、必ず之を着用することになつてをりますが、家に居りますときは用ひません。たゞ客に接するときは必ず着用するのであります。以前は禮服(교복)の制がありました。今日は全く廢れてしまひまして、喪中(상중)に喪服を着けるだけであります。

衣服の地質は木綿(무명)・麻(베)・絹(명주)などで、地色は、下衣には多く白物を使ひますが、上衣と周衣には鼠(회색)・茶(고동색)・水色(옥색)などを用ふるものも少くありません。一般に白色と青色とを尙ぶやうであります。是は儒教の感化によるものと思はれます。兎に角、汚れ易い不經濟な白衣を用ひることになつたのは、種々の理由にもよることではありますが、今日では全く朝鮮の共通趣味となつて居るのであります。併し昨今は色物の衣服が追々用ひられるやうになりかけました。

女子は、下衣の下に、普通二枚乃至三枚の細い股引を穿いて居ります。それはみな白地で且つ單ひとへであります。そして下衣の上には裳(치마)を纏ふのであります。裳には衿もありまして色物を用ひますが、他の物は必ず白地であります、又裳には紐の下に澤山な襞ひざがありまして、下がズツと廣がりますので、形態に變化の美を興へますし、時に裾をすぼめてスラリとした容姿に見せることも出來ます。上衣は男のものに殆んど變りはありません。地質も亦同様であります、色合は流石に華やかで、一般に濃厚なものが悦ばれます。併し田舎(시골)では多く白地が用ひられてをります。周衣は男子の服装でありましたが、近年は、京城その他の都會地では女子も着用するやうになりました。

女子が外出(나드리)するときは、以前は長衣(장옷)と稱する被衣を以て面貌を覆ふのが習ひでありましたが、當今は、都會地などは、殆んど廢れてしまひました。併し地方へはいりますと、尙その風を存してをる所もありまして、裳を長衣に代用してゐるものもあります。



食物は米飯(쌀밥)を主としたしますが、地方によつては、麥飯(보리밥)・小豆飯(팥밥)等を用ひます。副食物は、鳥・獸・魚肉及野菜などの料理したので、醬油(간장)又は味噌(된장)で味を附けます。調理法は汁物・煮付の二種ありまして、油で揚げたものも食べますが、酢の物は一般に嗜好されません。

漬物(김치)は朝鮮の副食物中の主なるもので、多く十一月に漬けます。如何なる低級の生活でも、二三甕を漬けないものはありません。僅かばかりの貯金を引出したり、給料の前借りまでしてこの用意をするのであります。材料は白菜(비추)又は大根(무)で、之に唐辛(고춧가루)・蒜(마늘)・芹(미나리)・生薑(생강)及び鹽漬(젓)の石首魚(조그)なご入れて、大きな甕に漬けるのであります。この他牡蠣(굴)・蛸(낙지)・明太魚(명태)なごの魚類や、梨(비)・栗(밤)・靑角(청각)なごを入れます。

酒類には、在來のものに火酒(소주)・藥酒(약주)・濁酒(탁주)がありますが、近來は、宴席(일석)なごでは内地の清酒(청주)・洋酒(양주)なごを用ひやうになりました。煙草(담배)は男女共に嗜好する風があります。

器皿(구경)には眞鍮器製のものに陶磁器があります。膳(소반)は脚付の高膳で、飯は匙(수가락)で、又又副食物は眞鍮の箸(젓가락)を用ひますから、膳の上に必ず匙を箸が載せてあります。飯は井(사발)に山盛にし、只一碗(한사발)だけで、幾碗も易へることをしません。又食事の度毎に温い飯を炊き、絶対に冷飯(잔밥)を食べません。副食物には好んで胡椒(후추)

唐辛・蒜等を加味し、漬物にも必ず此等の刺戟物を加へることは朝鮮料理の特徴であります。食は朝(아침)晝(낮)晩(저녁)の三食(列外)で、食後には茶を飲まずに、飯を炊いた後へ釜に水を入れて温めたところのお湯(찬물)を飲むのであります。朝鮮では朝飯(아침)を主としますので、副食物の數も朝が一番多いのであります。

## 九、住居

——男女有別の構造の間取。——

家屋(가옥)は木造の平屋建でありまして、外壁(밖장벽)は土と石とを混じて塗り、内壁(안벽)は土だけで塗り、室内は紙を張つてあります。屋根は普通藁葺であります。地方によつては石又は木皮で葺くところもあります。殆んど如何なる家でも温突(온돌)の間位を有たぬものはありません。温突は床下に數條の火坑(구들)を築き、その上に板石を並べて床とし、その床上を土で塗つて平にし、更にその上に幾重にも油紙(유지)を張つて絶対に煙の漏るゝのを防いであります。夕方(저녁)に少量の燃料を焚口(아궁이)に投げおきますと、火氣(불기운)が坑火を通じて煙突に逃れて行きます際に、石床を暖めて終夜室内をして程よき温度を保たしめる装置になつて居ります。頗る經濟的な、そして衛生的な採暖法であります。

家屋の構造間取は外舍(밖장치)と内舍(안치)とに區別するこゝが出来ます。外舍は中門(중문)の外に在るのが普通でありまして、之を舍廊(사랑)といひます。男子の居屋でありまして又客室

(식실)にも充て、傍に婢僕(비복、하인)の居室もあります。内舎は中門の内に在りまして、内庭(안뜰)を控へてをります。厨房(부엌)庫間(고간||物道)なごがあります。かやうに男女の區別を嚴にせる構造なのでありますから、女子は自然外來の男子に面接せぬのみならず、家族のもので男子は女子の室に入りませんし、女子も亦男子の室を窺ふことをせぬのであります。併し近來は大分開放的になりました。

内舎の内には板間(마루)の一室があります、之を大廳(대청)又は廳舍(청사)こいひまして、主に食事の用意、夏時の食事、女の裁縫、或は慶弔(경묘)の儀式(례식)を行ふ所となつてをります。

祠堂(하당)は祖先四代(스대)までの神主(신주||位牌)を安置する所でありまして、別棟(번치)又は別室(번방)に設けるのが正式(정식)であります、近來だん／＼に簡略にする傾向になつてまゐりました。

以上は間取の概要であります、兩班の階級又は富者(부자)になります、中々に複雑(복잡)で、房數なごも非常に多い。これは朝鮮は内地よりも一層大家族主義(대가족주의)で、一家の内(내)に幾夫婦も同居(동거)してをります、食客(식객)の多いのを誇とする、随つて奴婢(노비、종)も自然多數なもので、これに充つるそれ／＼の室を要するからであります。

元旦(경일초하루)は一年中の最も大切な名節なので、家内一同が早起して祭饌(제물)を雑煮(떡국)を調へ、祠堂(스당—祖先四代までの神主即ち位牌を安置せる所)に供へて禮拜(차례)をいたします、之を正朝茶禮(정초차례)といつてをります。新年(신해—大抵一日から十五日までの間)には老幼男女が皆新らしい衣服を着けます。之を歲粧(세장、세빔)と稱して居ります、年長者は、家に居て子女や親戚からの年賀を受けるのであります。子女は自分の家で禮を畢ります。次に、次には歲拜(세배)といひまして、師長又は親戚に廻禮をいたします。歲拜を受けた者は、俗に歲拜金(세배돈)といひまして、子女には小額の金錢を與へ、又一般の歲拜者には酒食を饗するのが例であります。

十五日を上元(상원)といひまして、當日は藥飯(약밥)を食べるのであります。藥飯は一に藥食(이ひまして、先づ糯米(찰쌀)を蒸し、これに松の實(잣)・栗(밤)・棗(대추)・蜂蜜(꿀)及醬油(간장)なごを加へて更に蒸したもので、一種の風味を有つてをります。上元の朝は燒酎(소주)又は藥酒を一杯飲むことになつてをります。これは耳の聰くなるやうにこの意であります。て、そんなところから此の酒のこきを、俗に耳明酒(이명주、귀밝는술)ともいふのであります。上元の朝を嚼齶(작찰、명을씹는다)といひまして、栗(밤)・胡桃(호두)・松の實(잣)なごを嚼碎く風習があります。一年中腫物(종괴)が出来ないといふ迷信に基いたものであります。それは當日の栗・胡桃・松の實なごを俗に「ポウルム」(보름)といひますので、類似語の腫物「プ

シロム(早시림)に結付けたのであります。また齒を強くすることも言ひ傳へてゐます。

上元の日は、夕方から炬火(회불)を持つて高處に登り、月の出るのを待ちます。之を迎月(달마지)といひひまして、先に月を見たものが吉運(길운)させられるのであります。又月色(달빛)を見て其の年の豊凶(풍흉)を占ふのであります。即ち赤きは早(가물음)、白きは水(장마)、濃きは豊(풍년)、薄きは凶(흉년)とするのであります。

上元の夜は踏橋(담교)といつて橋を渡る習ひになつてをります。年中健脚で足の病にかゝらぬといふ説に因るのであります。これは朝鮮語で脚(다리)と橋(다리)この音が同じである所から、かく附會したものと思はれます。

立春(입춘)の日は、都鄙を問はず、家々の門の板戸(문짝)に、或は柱に、吉意の文句を白紙に大書して貼付けます。例へば、「建陽多慶(건양다경)」「立春大吉(입춘대길)」、「愛君希道(애군희도)」「泰憂國願年豊(이근희도리, 오구원년풍)」。「天増歲月人増壽春滿乾坤福滿家(런증취월인증개, 천만건곤복만가)」などの類であります。尙一月には男は紙鳶(연)を揚げ、女子は跳板(널)の遊戯をいたします。室内遊戯に柶(육)といふものもあります。柶といふものは直徑一寸程の圓木を五寸乃至七寸の長さに切り、一面を平たく削つたものを四本作り、之を投げて、四本のうち上向になつたが一本なれば一點、二本なれば二點、……四本なれば四點、四本共に下向になれば五點と數へて競争するのであります。



二月一日は天井(천정)竝に家屋内外の掃除日であります。又草屋(초가집)には馬陸(야슴데노래기)が發生しますので、紙片(종지)に「香娘閣氏速去千里(향남각씨속거천리)なる八字の呪文(진언)を書いて、天井や棟木(곁가리)に貼付けます。香娘は美しい處女の意、閣氏は令嬢の義でありまして、馬陸を良家の處女に喩へて敬遠するのであります。

また一日には松餅(송편)を食べるこころになつてをります。製へ方は先づ粳米粉(알가루)に湯を注ぎ、捏(반죽)ねて卵大の皮を作り、次に小豆又は青豆の餡を入れ蒸餛(せいろん시루)に松葉(솔잎)を交互に並べて之れを蒸します。蒸し上がれば水で洗つて松葉を去り胡麻油(참치기름)に浸して食べるものであります。往時は、この日に、奴婢に對しては其の年齢と同數の松餅を與へたものであります。それ故に、俗に此の日を奴婢日(노비날)ともいひます。

六日の黄昏(황혼)、月光が未だ微かな時に參星(참성)「二十八宿(이십팔술)の一たる星」三月この位置を見て其の歳の豊凶を占ひます。之を參星占(참성점)といひます參星三月同行すれば豊凶相半ばし、參星が前なれば凶、後なれば豊凶決めるのであります。

### 〔三月〕

寒食(한식)は冬至(동지)後五百五日目をいひますので、二月になるこころもあり、また三月には入るこころもあります。當日は祖先の墓地に詣つて墓祭(묘제)を行ひます。四名節(명절)の一で、秋夕(추석)―八月十五日)と共に大切な日とされてあります。

三月三日を重三(중삼)といつて花煎(화전)を食べます。これは糯米粉(찰쌀가루)に湯を注

ぎ、適當の大きさに圓めて輪切りをなし、躑躅(진달래)の花を附けて油で揚げるのであります。この月は花笑ひ鳥歌ふ和暢の好季節なので、都人は酒食を携へて樹下に遊賞し、詩を賦するもあれば、兒童等は柳笙(버들피리)を弄ぶ者もあります。これを名も相應しい花遊(화유, 契노리)と稱してをります。

## 〔四 月〕

四月八日は釋迦(석가)の誕生日(탄생일)で、これを浴佛日(육불일)と稱してをります。當日は士女共に衣裳を着替へますが、特に兒女は八日粧(팔일粧)といつて盛装を凝らして遊ぶのであります。又此の晩を燈夕(등석)といひまして、夕刻になりますと、戸毎に紙で造つた燈籠(등동)に火を點じます。そうして男女は競ふて高い所に登つて之を眺めるのであります。觀燈(관등)といひますのは之を指すのでありまして、高麗(고려)の都であつた開城(京畿道)では、今も盛んに行はれてをります。

## 〔五 月〕

五月五日の端午(단오)には、女兒は菖蒲(장부)を入れた湯で顔と頭髮を洗ひ、新衣(신옷)を着るのであります。これを端午粧(단오粧)といつてゐます。又少女は、菖蒲の根で作つた簪(비녀)を頭に挿します、かくすれば疫病を除ける……といふ傳説に因るのであります。この日には艾餅(송편)を作り、祠堂に供へて茶禮を行ひ、各自も亦之を食するのが例であります。尙都鄙を通じて、婦女子は鞦韆(호미)の遊戯をいたします。黃海・平安の諸道が特に盛んなやうであ

ります。

〔六 月〕

六月十五日を流頭(유두)といひまして、水團子(물경단)を食べる例になつております。水團子は、糯米の粉に湯を注ぎ、蒸して棒状にまるめ、之を輪切りにして冷水に沈め、密水(밀물)に浸して用ひるのであります。又之を祠堂に供へます。

三伏中(삼복중)は炎暑が殊に甚しいので、酒を携へて溪流の邊なる所謂水榭(물외청스)或は山亭(산정)に行きまして、詩(시)を賦したり盃(잔)を交はしたりして一日の暑を忘れるのであります。そして時々下り立つては清流に足を冷やしますので、之を濯足(탁족)なご名つけて居ります。

〔七 月〕

七月七日は所謂七夕(칠석)でありまして、索牛(견우)・織女(직녀)の二星が相逢ふの日とせられてをります。當夜未婚(미혼)の女子(녀스)は、この二星を拜して裁縫の上手になるやうにご祈ります。又鵲(외치)は銀河(은하)に橋を架けるため、悉く上天して地上には居らぬといひ傳へられてをります。この日は衣服や書籍(서적)を日光に曝(외여외)して蟲の害を防ぎます。書籍の蟲干をするのを曬書(건서)と名つけて居ります。又當日は、祭饌を調理し、祠堂に供へて禮拜をいたします。

十五日を中元(중원)又は百種日(백종날)と稱し、又白中節(백중절)ともいひまして、僧尼

(승리)・道俗(도승)ひこしく齋を設けて佛に供養(공양)し、寺院(찰)に詣でるのであります。この日に、南鮮地方では、若い者に角力を取らせて、優勝者には牛を賞として與へるのが習になつて居るさうであります。

## 〔八 月〕

八月十五日を秋夕(추석)といひます。此の日は寒食(한식)と同様に墓祭(묘제)を行ふのであります。墓地の雜草(잡풀)を刈るのを伐草(벌초)といつて居ります。夜は所謂中秋(중추)に當りますので、明月を賞で、夜の更くるを忘れるのであります。秋夕は農家の名節(명절)なので、新穀(새곡)を以て酒や餅を造り、或は種々の食物を調理して一家團欒(일가단란)食膳(밥상)に對して、一年の勞苦を慰むるのであります。農家八月仙(농가팔월선)といふ言葉があるほどであります。地方によつては、當日に歌舞(가무)・綱引(줄잡기)・角力(씨름)なごをいたします。

## 〔九 月〕

九月九日は即ち重陽(중양)の節日で、また重九(중구)もいつてをります。都人は郊外に出で、紅葉(단풍)を賞し、文人黑客(문인묵객)は黃菊(황국)を酒に泛べて詩を賦したり古詩を吟じたりして、一日の清遊をほしまゝにするのであります。この日には亦菊花煎(유화전)を拵へます。三月三日の花煎(화전)の同様のもので、たゞ菊花を以つて躑躅(적지단)に代へるのであります。

## 〔十 月〕

寒食・秋夕の以外に、十月中の吉日(길일)を選び、一族が多数集つてば、墓地で祖先の祭祀(제사)をいたします。之を時祭(시제)といひまして、日は丁日(딩일)又は亥日(해일)を吉としてあります。朝鮮では、祖先四代までを住家の祠堂に祀り、五代以上は神主を墓地に埋安して、墓で時祭を行ふ定めになつてをるのであります。

又この月に家神を祀ります、これを告祀(고사)と稱し、糯米の粉に湯を注ぎ、次に小豆を加へ蒸籠(せいろう)に入れて蒸して作り、之を家神に供へます。告祀の日は戊午(무오)に當る日を吉として居ります。

### 〔十一月〕

冬至(동지)を亞歲(아제)といひます。此の日は小豆粥(팥죽)を作り、團子(경단)をこれに交へて食べます。又祠堂にも小豆粥を供へて禮拜をいたします。尙又この小豆汁(팥물)を門の板戸に塗るゝ惡疫(염병)を祓ふといふので、かような事も行はれてをります。

### 〔十二月〕

歲暮(외말)の進物(진물)を歲饌(외찬)又は歲儀(외의)といひまして、恩顧(은혜, 은교)を受けたるもの、尊師(존사)・舊知(구지)その他奴婢等に贈ります。歲饌として最も普通<sup>1)</sup>に用ひらるゝ物は、雉(꿩)・鶏(닭)・鶏卵(계란)・明太魚(복어)・煙草(담배)・反物(필수)などであります。

晦日(첫달믈음날)には夕刻に祠堂を拜し、又尊長親戚等に歲末の挨拶を致します、これを舊歲

\*米をとぐとき  
用ふ

拜ひを稱してをります。晦日はまた除夜(제야)。除夕(제석)をいひまして、各室内に火を點じ、老幼を問はず鶏鳴の頃まで眠に就かず居ります。所謂守歲(介夕)であります。若し睡る様なきがありますと、眉が白くなるこの言ひ傳へで、居睡つた兒女などはよくからかはれるのであります。又除夕には、一般に福筮(복소리)を買ふのが例となつてをります。これは迎福(영복)の意から出たものであります。

〔圖 月〕

閏月(윤달)は俗に閑月(한월)ともいひまして、老親(노친)のあるものは、親の爲めに壽衣(介의)死者に用ふる着物(을縫ふ風習)があります。一寸妙に聞えますが、これは、斯くすることが反つて長壽(장수)を保つといふ縁起に基いたのであります。

一一、補 遺

以上で、極く大要ではありますが、朝鮮風習の如何、内地との異同點は何處……いふことがほど明かになつたことと思ひます。その内で、類似點は別に問題にはなりません、相違點は内地人として心得ておく方が何かに便宜かと思はれますので、こゝに尙多少の補綴を加ふことに致しました。

言語は交際上何よりも先に立つもの、そして最も多く使用され、また微妙な關係を有つものであります。こゝころが、此の言語がそれ……國語を鮮語に、鮮語を國語に……翻譯される場合

に内容——意味のシツクリ合はない語を以つてしたり、我は誤譯されたり、更に適用を誤つたりして、思はぬ悲喜劇を演ずる場合が可なり多いやうであります。

ヨボ。こいふ語は、朝鮮人同志では、單に「もしく」(여보)「此方を見なさい」こいふ意味に解せられるのですが、内地人のは「朝鮮人」こいふ意味で、「ヨボさん」「ヨボの先生」なごゝ使用されてをります。それに國語の方では敗殘者——意氣地なき者——に對する侮蔑を意味しますから、朝鮮の人は、非常に此の語の内地人によつて使用されることを嫌つて居ります。

何々君の君。(군)こいふ語も、朝鮮では例へば인력거군。(車夫)の如く、勞働者に用ひる語と音なので、これ亦大なる侮辱と感ずるのであります。

同一意味を表はすのは、内地人の解釋と違つた文字を用ひてゐるのがあります。例へば、内地人の相談。こいふ語に對して朝鮮人は議論。こいふ語を用ひ、騷。ぐに對しては喧嘩。船より上陸を下陸。(하강)と反對語を用ひます。それは先づ可いにして、賃借を貰。(취)と用ひられては、内地人には承知が出来ないでせう。

國語の普及は喜ばしいですが、それだけ半可通の誤用の多いことも心せねばなりません。「私の所へお出下さい」を「……行きませう」で招待の意を表したつもりでゐたり、「此の本を見せて下さい」を「……見ませう」で机上の書冊をサツサと失敬したりして行く場合もあります。

「何處へ出掛けますか(어디가십니까)」と問へば「何處へ出掛けます(어디갑니까)」と應じ、「何を買ひますか(무엇을사십니까)」と訊ねると「何を買ひます(무엇을삽니다)」と答へます。

鸚鵡(잉부)返しの返辭は、嘲弄的(호롱)に内地人に聞えますが、實は何處へか出掛けたいと思ひます「何か買いたいと思ひます」の意味なので、さうご知つて見れば腹も立てられません。

禮儀(례의)―體面(체면)を尊重(존중)するためでせう。朝鮮では敬語が著しく發達しておられます、そして對者の身分、年齢に應じて對下語・對等語・對上語・對最上語の遣分けをしますのであります。若し誤つて相當以下の敬語を用ひようものならば、今もで羊の如うな溫順(온순)な男が、猛獸(잉介)のやうに怒つて、吃驚させられることがあります。さればさいつて、餘りに相當以上の敬語も亦嘲弄するものにして御機嫌を損する虞れがあります。

内地人の盛に使用する御3こいふ敬語は、王者(임왕)以外には用ひないことになつてゐます。ですから、内地人に對して「御」の敬語を缺いても、それは輕視してのこころではありません。

【老】者(늙은이)・已婚者(기혼자)が尊敬せられ、幼者(어린이)・未婚者(미혼자)が輕視される風習なので、電車(전차)の中などで、幼少者に向つて席を譲るべく強要する長老(은이)を見るのは不思議ありません、自己の特權を主張したまでゝすから……。

他人に世話になり、又は物を惠まれたりしても、お禮も言はぬこいふことは前に記した通りで、内地人は氣を悪くしますが、これは感謝の念がないからではなく、寧ろ長く記憶して忘れぬこいふ一つの意思表示なのであります。内地人のやうに直に言動に現はす者は、寧ろその時限りの感謝で小人の行爲3見做すのであります。

吉凶に際しての挨拶や贈答は、時3場合によつて輕重の存するこころは内地も同様ですが、其の時



期に性質に餘程相違があります。例へば、出産(히산)があつても直に祝ひませんが、百日目か、特に第一回誕生日(돌)に於ては、一族相會して盛大なる祝賀の宴(잔재)を張るのであります。一般に朝鮮では誕生日(싱일)を重じまして、一家の者の誕生祝は毎年缺かしませんから、時としては御祝續きの月もある譯であります。

肌(살)を現はすことは朝鮮人の最も嫌忌するところであります。この點に無頓着な内地人は、そのため朝鮮人からは下賤視されるのであります。朝鮮人は單に肌を表はさぬのみならず。室内にいへぎも衣冠(의관)を整へてをります。彼の冠は帽子(모스)とは全く反對で、脱ぐことは非常に失禮となつてをります。ですから、人を訪ねて愈々歸る段になるに、例の冠の緒(모)を止し、手袋(장갑)襟卷(목도리)までもつけて、それから「さらば……」と挨拶に及ぶのであります。

朝鮮の室では、溫突の焚口(아궁이)の方が上座(상좌)でありますから、長者には上席を讓ることを忘れません。日本間や何々會場なごになりますと、上下の標準(표준)が判らぬため、上座も知らずに、床柱を背に端然と澄ましてゐるやうな滑稽(의상부림)が演ぜられるのであります。また座布團(마포)は溫突に備付の品で、必ず之に座する習ひになつてをりますから、内地人の家を訪ねても、勧められもせぬ内にドツカミ占有して平氣でゐるのです。來客に對する一の優待品は知らないからであります。

相手が長者でありますと、目下のものから辭をかけるのは非禮にあつて、お聲がよりのあるまでは

黙然としてをります。無愛想でも忌嫌つてゐるのでもありません、謹慎の意を表してゐるのです。中以下の家を訪問します。「おは入り……」こもいはないで、門口での立話で用を辨ぜねばなりません。これは、客室(사당)が無いのこ、内へ入れば婦人この面接を餘議なくされるこを慮つてのこであります。

朝鮮人が内地人を訪問するこ、「御免下さい……」までは可いですが、朝鮮式に頗る高調子であります。それから玄關に入りましても、御用は？ 此問はねば黙然として何時までも佇立しております。それゆゑ、物騒な人間のやうに誤解されるこが間々ありますが、實は謙遜の徳をそのまゝ實行してゐるのであります。

また物なご持參して内地人を訪ねましても、たま／＼主人が留守でもありますこ其の物を夫人に手渡ししようこもせず、復た來ますこばかりサツサト持歸つていきます。これは夫人この交渉を遠慮してのこであります。朝鮮では、男女が正視すれば既に相許したものと認定される位ですから、内地人のやうに男女が馴れ／＼しく會話を交へるこを賤んでをります。ですから、内地式に「奥さんによろしく……」なごいふお世辭は禁物であります。

なほ擧げていきますれば數あるこですが、今はこれ位で止めておきませう。凡て自分等のこ違つたものは一向に奇風異俗として賤視し排斥したがるものですが、異なるのは只形の上のこですですから、そんな狭い皮相な考は捨ててしまつて、形骸の末に拘泥せず、よく精神の存するこころを酌取つて、お互に濫い交際をつゞけていきたいものです。そして、改むべきは合理的に改め化し

ていつて、漸次に良風美俗を築いていきたいと思ひます。

五五頁で説いた如く、朝鮮人の笠(火)は、帽子と違ひ冠であるので、これを脱いで人に接するのは非禮なのであります。随つてこの笠を大切にすることは非常なもので、上等のものは「火習」といふ入れ物に入れてチャンと仕舞つて置きます。便所に入る時は脱いで入ります、それで便所の外に笠を掛ける釘が打つてあります。喧嘩をする時でも、先づ笠をとつてから、さて取つ組合ひを始めるといふ風であります。

或る高貴な方の通過されるのを見やうと、大勢の朝鮮人が集つて居るのを、朝鮮の風習に通じない内地人巡査が、帽子をとれといつて、無理やりに朝鮮人の「火」をとらして居るのを見たことがあります。

本書は、元來昭和三年四月朝鮮教育會より發行したのであるが、幸ひ江湖の歡迎を受け、數日ならずして再版を發行するに至り、更に今回第三版を發行する運びとなつたのを機會に、全部に亘り訂正を施し、多少の増補を爲し、活字をポイント式に改め、發行權を書肆日韓書房の懇請に任かせ同店に移した。故に、奥附には昭和四年六月初版といふ形式になつて居るが、實際は第三版に當るわけである。今後四版五版と重ねて行く毎に、適宜増補を行ひ度いと考へて居る。

(著者)